

東アジアの将来と日韓宗教指導者の役割

2010年11月23日

岩波書店『世界』編集長

岡本厚

1、 宗教はいつも「平和」を語り、祈ってきた。しかし……

<宗教>——

<絶対的価値>としての「宗教」（人生観、世界観に決定的な役割を持つ）
死を超える力、自己（個）を超える力（受難、殉教）（非合理的人間）
利他、愛他、共助（助け合い）、平等への志向、弱者への配慮、救済、献身、宇宙への崇敬
もっとも「美しい」ものであると同時に、もっとも「激しく恐ろしい」もの（宗教戦争）
近代国家はどのように生まれたか（政府、国民、民族、歴史、言葉、憲法）

<資本主義>——

利己、自己の利益を最大化するために行動する（合理的人間）
人々を「豊か」にすると同時に、貧富、格差、を生み出す
自由への志向

<近代における資本主義と宗教>——

民族主義、国家主義、社会主義の中に、「宗教性」
豊かで自由な社会になぜ宗教が盛んになるのか（日本の経験、現在の中国など）「心の空洞」

2、 東アジアという地域の困難

<血ぬられた近代>——

列強による侵略と強いられた近代化（近代国家、産業化＝資本主義化）の苦悩
近代国家設立、民族形成の苦難（いまだにその途上にある。朝鮮、中国）
一足先に「近代化」を遂げた日本による侵略戦争と植民地化

<引き裂かれた東アジア>——

第二次世界大戦——中国、フィリピン、ベトナム、マレーシア（シンガポール）、などの戦乱
戦後——中国の内戦、朝鮮戦争、ベトナム戦争（インドシナ戦争）、中越戦争など、アジアは「冷戦」ではなく「熱戦」の時代であった
より深い傷跡、対立、憎悪感情、満足されないナショナリズム
1980年代ころから、安定し、平和的な経済活動が可能になり、いまや世界でも最も発展し、活発な地域となる。ASEANの挑戦

戦後、(西)ドイツはヨーロッパの中で生き、日本は米国との関係の中で生きた
なぜ「東アジア」共同体ではなく、「ASEAN+3」なのか？

3、 世界的な大転換期の中で

米国の衰退と新興国の勃興（4匹の龍から、中国、インド、ブラジル、南ア、インドネ
シア、タイ、ベトナム……）

「東アジア」という単位が形成できるだろうか？ また形成するために、どのような原
則に基づき、どのような共同性を持つのか？

圧倒的な経済の結びつき（ほとんど一体）と意識の乖離、火のつきやすい対立構造
「排外主義」「外人憎悪」の興隆

4、 宗教と宗教者の役割

<国内での役割>

「心の空洞化」を抱える近代人（資本主義に生きる人間）と宗教
愛他、利他、共助、平等、弱者への配慮をいかに発揮していくか

<東アジア地域での役割>

相互の対立をいかに抑えるか（民族主義、国家主義、冷戦意識）——他者を理解する

<地域外での役割>

東アジアの外側の地域での戦争、対立に共同で対処（たとえば、中東など）